

【前口上】

去る 2011 年 7 月 17 日、言語社会研究科紀要『言語社会』第 5 号特集 1 「トランスアトランティック・モダニズムⅡ——政治的読解の現在」の合評会を開催した。評者として、現在の日本の英米文学界の指導者的存在と言える慶應義塾大学の武藤浩史氏、筑波大学の宮本陽一郎氏をお招きしてご意見、ご叱責をいただくことができたのは、貴重な機会だった。

私は本研究プロジェクトの代表者として、また『言語社会』編集委員として今回の特集企画に関わったのだが、正直、「紀要」という媒体にはかなり懐疑的でもあった（個々の教員が書きたいことを書き散らすだけ、いわゆる「読者 1.5 人」状態の紀要論文なるものの、存在理由がよくわからない）。しかし同時に、公費を使って刊行する以上はある程度社会に対して説明責任を負えるものを創りたいという、小市民的な野心がなかったわけでもない。今回の企画を通して、個々ばらばらの研究論文をいっしょに閉じただけの冊子体ではない新しい紀要のかたち、萌芽的な共同研究の発表媒体としての紀要の意義を発見することができたとも思う。

最後になりましたが、「紀要ごとき」の合評会参加を快く引き受けてくださった武藤氏、宮本氏に深く感謝申し上げます。また、特集の討論会の編集、合評会の準備と取りまとめ等、煩雑な作業を担当してくださった三浦玲一氏に、あらためてお礼を申し上げます。

(中井亜佐子)